

木原武一著「天才の勉強術」新潮社 1994年6月1日刊を読む

天才の学び方(3) ゲーテ

- ・天才は、普通の人びとがただ1回しか持たぬ「青春」を何度も繰り返し経験する
- ・「青春」とは生命力の高揚であり、そういう生命力の異常な高まりの中で何回かの画期的な仕事を成し遂げて、人類に未ながく記憶されるような人間、それが天才。天才は何度もそういう「青春」を経験する
- ・人生はまさしく青春の反復。「反復する青春」。
- ・「ファウスト」…きれいな花は、どれもこれも自分の手で摘んでみたい。花を摘むたびに詩を書いた
- ・「詩はすべての機会に詩でなければならない」
- ・詩をつくるための動機と素材は現実の出来事から与えられたものでなくてはならない。現実のある特殊な出来事も、詩人の手にかかってこそ普遍的なものとなる。
- ・私の詩はすべて機会(現実の世界で体験する出来事)の詩だ。すべて実現によって刺激されたものだ。そこから詩は生まれる。
- ・天才とは、他から提供されたものを自分の役に立てる才能。すべて自分という土壌から吸い上げようとしたら偉大な天才は生まれない。
- ・薔薇(ばら)を見たら詩をつくれ、リンゴを見たらかじりつけ
- ・過去の出来事を美しく飾って表現することほど素晴らしいことはない。ある特殊な場合が普遍的で詩的なものになる。
- ・ものごとを学ぶ意味は、経験から何事かを創造することにある。何かを学んで自分一人で納得しているだけでは学ぶことは完結しない。経験を動機や素材にして、目に見える成果を生み出してこそ、学習は実を結ぶ。いったん学んだことは、いつか生かされ、表現されることを求めているのである。
- ・自分一人の特殊な体験をもとに、多くの人びとから共感を得るような普遍的なものをつくり出すこと。
- ・およそものを学ぶということ自体、知識という普遍的なものを相手にすることであり、文学作品も普遍に通じてこそ、傑作と評価される。
- ・肝心なのは自分自身を完成していくこと、すべての学習や経験はそのためにある。若さと生気があってこそ、ものを学ぶ意欲と創造する意欲は生まれる。



<コメント>

「モーツァルト」「ニュートン」「ゲーテ」「ナポレオン」と、天才といわれる人々の勉強の仕方は参考になります。「深く狭く」と「広く浅く」のバランスこそが肝と考えます。

2021年7月9日林明夫記